



II-23-③

方形竪 (一般的な武家の屋敷)

～法然上人御伝～

II-23-③



II-23-④-a



II-23-④-b

内堀土橋

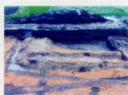
II-23-④-b



II-23-④-c

外堀土橋

II-23-④-c



II-23-④-d

内堀南東コーナー付近

II-23-④-d



II-23-④-e

外堀南東コーナー付近

II-23-④-e

はら い せき 原 遺 跡

平成3年の稲塚中田線建設計画に伴う発掘で初めて調査が行なわれた当遺跡は、この道路(現仙台南線跡)開通後、店舗の出店ラッシュや道路整備により平成7年～11年にかけて継続して行なわれて多くことが明らかになりました。

それによると当遺跡は縄文時代から近世にかけての複合遺跡で、特に弥生時代は多くの土器や石器などの多数が出土し、土器積層群の発見なども見られることから遺跡の主体を占めています。

今回のテーマの古代では、竪立柱建物跡が多く見られ、中世では、平成10・11年の調査で竪立柱建物群を幅2m前後、一辺6mの方形の区画を溝で囲んでいる居館跡が発見されました。この居館跡の竪立柱建物跡は25棟以上を数え、全体で3・4回の建替えがあったと見られます。他に竪(溝)、井戸、鑿穴状遺構、土嚢などの遺構が見られます。出土物については、陶磁器(陶器:常滑・古瀬戸・在地産の蓼・壺など、磁器:中国龍泉窯産の青磁)や北宋銭等が見られ、年代は13世紀後半～14世紀前半(鎌倉時代後半)と思われます。特に特別なものが見られないことから、居館跡に居住した人は在地の村落領主層クラスと考えられます。

II-24-①

後内13世(13世紀後半) 51号(13世紀後半)
原遺跡(居館部分)の遺構配置図



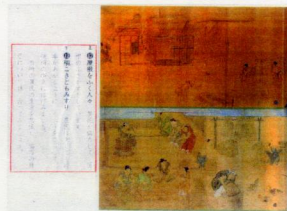
II-24-②



II-24-⑤



II-24-③



II-24-④